

山 部 赤 人 論 (一)

— 卷八雜歌六首誕生の背景 —

岡 田 喜 久 男

み吉野の象山きよのやまの際まの木末こゝろにはここだもさわく鳥の聲かも (九二四)

ぬばたまの夜の更けゆけば久木生ふる清き川原に千鳥しば鳴く (九二五)

山部宿禰赤人の歌四首

春の野にすみれ採みにと来しわれそ野をなつかしみ一夜寝にける (一四二四)

あしひきの山櫻花はな日並べて斯く咲きたらばいと恋ひめやも (一四二五)

わが背子に見せむと思ひし梅の花それとも見えず雪の降れば (一四二六)

明日よりは春菜わかな採まむと標しめし野に昨日も今日も雪は降りつつ (一四二七)

確かに右六首が赤人の叙景歌の真髓である事は間違いないし、和歌史的にも注目されるべき秀歌であろう。そして私は「春の野に……」の歌以下四首が赤人の到達した最終の歌境であったと考えている。ただ右六首以外に四十三首の長短歌があつて、その中に見られ

幸か不幸か私達は万葉集以後に詠まれた尠大な量の歌と、それによつて營々と築かれた和歌史について様々の知識を持つてゐる。のみならず、随時万葉の歌を見、類歌を探し、又瞬時に千余年の間を飛び越える事が可能である。山部赤人が万葉集に四十九首の歌を残し、中古以来歌聖と仰がれて来た事、近代の歌人、特に島木赤彦によつて絶讃された事は殆んど常識である。恐らく私同様多くの人がまず赤人の歌に接するのは百人一首においてであり、その歌人評の嚆矢を古今集序の中に見出して、赤人の歌が優秀な事を知るのである。然し、万葉集の赤人の歌四十九首の全てを通して見る時、世に喧伝される赤人像が果して正当か否か、俄かに判断する事は少くとも私には極めて困難であつた。赤人の歌としては、有名な「不二の山を望める歌」(三一七・三一八)を初出として、從駕の歌、羈旅の歌が大部分であるが、普通赤人を論じる時引かれる歌は、「吉野讃歌」(九二三)の反歌二首と卷八の謂わゆる「赤人の歌四首」(以下「四首の歌」と略稱する)などである。

山部赤人論(一) — 卷八雜歌六首誕生の背景 —

る赤人は決して右六首の赤人と同質のものではない。本論文では、従来の赤人像を簡単に見る事から始めて、從駕の傳統的讚歌からいかに脱し、「四首の歌」に到ったかを私なりに考えてみたい。先学諸氏の中では「山部赤人の研究―その叙景表現―」の中で尾崎暢映氏の次の意見に最も讃同の意を覚え、教えられる所が多かった。

人麿・黒人・憶良・旅人・家持等みな、律令政治のもたらした現実のゆきづまりに直面し、そこからそれぞれの資質に即し、それぞれの方法で歌を得來った。―中略―黒人は、内生活に対するあわれに寂しい、しなやかな反省があった。しかるに、そのような悲傷の鬻りは赤人のものにはほとんど認められない。けれども、赤人には赤人なりの、当代に処する上での省察があり、歴史の認識があった。これが赤人をして追憶の世界―過去の史実や伝説―に眼を向けさせることになり、その作品にあのような、静肅な感動にうらづけされた清澄さを加えることになった。

尾崎氏の言われる「当代に処する上での省察」、及び「歴史の認識」が赤人叙景歌の秘密を解く鍵であるに違いないが、それがいかなるものであつて、赤人の歌をどう變化させたのかについて考えてみたい。

ところで、赤人が万葉における叙景歌の完成者であり、後代自然詠の嚆矢となつた事は既に多くの人の説く所である。勿論記紀歌謡から万葉第一期第二期の歌人達へ、就中黒人から赤人へと流れる叙景歌完成の長い道程を見過す事は出来ないが、赤人叙景歌はいづれの歌人達もなし得なかつた、知的な、平淡で抒情性に富む美の描写に成巧した。今その記紀歌謡以来の叙景歌完成の過程を辿る事はし

ないが、万葉第三期においてその結果を見た事は、右の尾崎氏も説かれるように、社会的な又和歌史的な必然であつた。ただ私が近年不思議に思い、万葉第三期の歌人達について一応見渡す作業が終つてから考えたいと思つている事がある。それは一体「個性の花開く」とか「文学的に最高の時」と言われるこの時期は、本当にそのような客観的必然性によつてのみ、われわれの前に存在するのであるうか、と言う事である。叙景歌人山部赤人、人生（思想）歌人山上憶良、伝説歌人高橋虫麿と冠稱を持つに相応しい特色ある歌人や、筑紫歌壇を率いた大伴旅人―彼は歌を風流の意識で作つた最初の人でもあつた―などを挙げてみると、第三期の歌人達が、いかに個性的かつ優秀であつたかは誰もが認める所である。然しながら、各々の歌人達の存在が、かくも個別的で特色に富んでいるのを、万葉歌の自らなる成長発展であり、中国文学などの影響による必然の結果であるとするのはどうしても納得できない。先程、客観的必然性と言つたのは右のような事象を指したのであるが、私はそれに対応する恣意的条件があつたのではないかと考えているのである。それは簡単に言つてしまえば、大伴家持を最終編纂者とする人々の撰択意識の問題であると言える。即ち、一人家持だけではないかもしれないが、各巻々を編纂した人の目に、これが赤人歌であり、これが虫麿歌であり、これが憶良歌であるとする意識があり、それに適う歌が撰択され、その結果を今日私達は見ているのではないかと思うのである。今それについて詳論する余裕はないが、防人歌として奉られた中から拙劣なものを遠慮なく捨てた家持であり、巻五の末尾に

右の一首は、作者いまだ詳ならず。但歌しを裁る體、山上の操に似たるを以ちてこの次に載す

と注記をする編者である所から考えて、「金村の操」「虫麿の操」「福麿の操」は夫々、「笠朝臣金村歌集」「高橋連虫麿歌集」「田辺福麿歌集」から撰ばれたものではなかるうか。こう考えると、赤人の歌も、吉野讚歌などの從駕応詔の歌は当然採られるべくして採られたのであろうが、巻八に載せられた六首などは、「赤人らしさ」の爲に撰出されたのではないかと思われて来るのである。

さて先に、叙景歌完成の道程は長いものであったと言ったが、実は赤人内部においても巻八の「四首の歌」に至るまでの過程と必然性があつたのである。次にその過程を従来の赤人評価と結びつけて辿つてみたい。

二

赤人歌が和歌史上で最初に賞讃されたのは既に、万葉集の内部においてであつたと私は考えている。それはよく知られている、大伴家持と大伴池主の書簡中に見出される「山柿」を赤人・人麿併稱の辞であると考えるからである。「更に贈る歌一首」(三九六九)の前に付けられた家持の文章のその部分は

舎弘の徳、恩を蓬體に垂れ、不實の思、陋心に報へ慰さむ。來眷を戴荷し、喻ふること無し。但し稚き時には遊藝の庭に涉らざりしを以ちて、横翰の藻、おのづからに彫蟲に乏し。幼き時には山柿の門に逕らずして、裁歌の趣、詞を聚林に失ふ。……

とあり、それに報えた池主の(三九七四)歌の前文は

山部赤人論(一) 一巻八雜歌六首誕生の背景

昨日短懷を述べ、今朝耳目を^{けが}けす。更に賜書を承り、且奉る。と不次なり。死罪々々。下賤を遣れず、頻に德音を惠む。英靈星氣あり。逸調人に過ぐ。智水仁山は既に琳瑯の光彩を鑑み、潘江陸海は^{もとよ}自ら詩書の廊廟に坐す。思を非常に^は駒せ情を有理に託し、七歩章を成し、數篇紙に滿つ。巧みに愁人の重患を遣り、能く恋者の積思を除く。山柿の歌泉は此に比ぶれば^な蔑ぎが如し。……

とある。二人の謙遜と讚美の文章を敢えて引用したのは、原文紹介とともに、当時の典拠主義と、美辭麗句の文体が文人達の間で愛好された状態を指摘したからである。それにしても兩者の文藝に抱いた熱い思いを強く感ぜざるを得ない。いわゆる「山柿の論」には知的パズルを解くような面白さがあり、研究者の多くが一度は意見を開陳する問題であるが、私は既に述べたように、赤人・人麿説を採っている。ただし、右の語句が古今集の撰者、特に紀貫之に直接影響を与えたなどと言うつもりはもちろんないが、あたかもこれを受けたように古今集の両序は赤人を高く評価している。仮名序に

山の辺のあか人といふ人ありけり。歌にあやしく、たへなりけり。人丸は赤人がかみにたむ事かたく、あかひとは人まろがしもにたむことかたくなむありける。

と言ひ、真名序に

然猶有先師柿本大夫者。高振神妙之思。獨歩古今之間。有山辺赤人者。並和歌仙者。

と述べている。仮名序の古注に赤人の歌が二首挙げられているが、それは前掲の「春の野に」(一四二四)の歌と巻六の「若の浦に」

(九一九)の歌で、今日でも赤人の代表作とされるものである。古今集は勅撰集としての権威があるし、序の歌人評は(特に仮名序は)文学論としても勝れていたもので、後世の赤人観をかなり強くリードしたのであった。然し、赤人評の画期的なものはやはり賀茂真淵の「万葉集大考」における次の言葉であろう。

柿本朝臣人麻呂は古へならず後ならず一人のすがたにして、荒魂・和魂いたらぬくまなんなき。……山部宿禰赤人は、人万呂とうらうへ也。長哥は心も言もたゞに清らを盡せり、短うたこそ是も一人のすがたなれ、巧みをなさず、有がまに／＼いひたるが妙なる哥と成にしは、本の心の高きが至りなり。譬は檜榔の車して大道をわたるぬしのあからめもせぬがごとし。

と、人麿を高く見てはいるものゝ、赤人の歌風と長短歌の優劣を適確に把握して、近代の赤人論はこの真淵に、大きな影響を受けたのであった。

近代になってからは万葉集理解が一層正確になり、赤人の真価が徐々に明かになって来たが、大きく分ければ、平明清澄な詠みぶりと叙景歌の完成度の高さを評価する意見と、平坦で独自性のなさに、迫る所がないとする意見に分かれる。前者は島木赤人氏以来多くの人が主張しているし、後者は土屋文明氏をその代表者とする事が出来るが、赤人の人麿模倣と長歌における情熱の不足はこれ又多くの人の指摘する所である。近年、万葉歌人の再評価が始まり、大伴旅人の未奏上の小長歌(三一五)も意味あるものとする論もある位であるが、赤人の場合は従来人麿の「吉野讃歌」(三八)の影響が強いとされる「吉野の宮の歌」(九二三)に対して、反歌(九二四・

九二五)の優秀だけが強調されて来た。然し赤人の反歌は長歌との緊密な構成意識によって生れたものであるとして犬養孝氏は^{註1}

彼ほど知的な構成意識を縦横に發揮したものは少ない。万葉第三期のごとき、個と美の自覚されて来た時代にして初めて出現の可能なるものといえよう。赤人を題材の上から自然歌人と称するものさしつかえないが、美の表出の在り方からいえば、まさに屈指の、意識されたコンポジションの作家といふべきである。

と説かれる。然しながら、窪田空穂氏が「萬葉集評釋」の中で「不盡山の歌」(三一七)について

詠み方の上からいうと、情意を尽くして詠んでいるが、暢達^{ちやうたつ}の趣はなく、どちらかというところと苦澁に近いところがあるといえる。と言い、有名な反歌

田兒の浦ゆうち出でて見れば眞白にそ不盡の高嶺に雪は降りける(三一八)

の評で、

長歌と反歌との関係という上から見ると、人麿のものはきわめて緊密であるが、それに較べると、赤人のは間隙をもっているものが多い。この歌にもその趣がある。

と言うのが正当なようである。反歌、即ち長歌に対する短歌の優秀さがより明瞭が例としては「神龜元年甲子冬十月五日、紀伊国に幸しし時」の歌「九一七・九一九」がある。

やすみしし わが大君の 常宮と 仕へまつれる 雑賀野^{さひかの}の
背向に見ゆる 沖つ島 清き渚に 風吹けば 白波騒ぎ 潮十
れば 玉藻刈りつつ 神代より 然そ尊き 玉津島山(九一七)

反歌二首

沖つ鳥荒磯の玉藻潮干満ちて隠ろひゆかば思はえむかも(九一

八)

若の浦に潮満ち来れば潟を無み葦辺を指して鶴鳴き渡る(九一

九)

高木市之助氏は長歌の「やすみしし、わが大君」の慣用句を人磨の長歌(三六)の同じ表現と比較して、赤人の天皇観に「或る空虚感が感ぜられると言った方がよささうである。」と言われる。天皇讃歌にどの程度の実感がこもっているかは常に難しい問題であるが、少くとも右の赤人の長歌にはその実感が乏しい。それに対して、反歌二首は生き生きとその存在感を主張している。「沖つ鳥……」の歌は巻八の「四首の歌」の第二目と同じような表現をしている、理屈の歌である。「若の浦……」の歌については土屋文明氏の『萬葉集私注』に次のような評がある。

赤人の作として古くからもてはやされた作である。軽快に歌はれて居ることは認められるが、巻三、黒人の作「櫻田へ鶴なきわたる愛知潟潮干にけらし鶴なき渡る(二七二)に及ばないのは「潟を無み」の所に理が這入って感ぜられる為であろう。之は作者は意識して用ゐた句と思はれるから、其の責は作者が負はねばなるまい。つまり作者は此の句を詠み得たりと思つて用ゐたに違ひない。

理が拙難されているが、この理こそが赤人の追求したものであり、黒人の歌からの進歩を赤人は充分確信して詠んだものであった。長歌に対する短歌の優秀さは「吉野讃歌」(九二三)に対する先に挙

山部赤人論(一) 一巻八雑歌六首誕生の背景

げた反歌(九二四・九二五)について最もよく言われる。確かに、赤人の反歌が独立しようとする傾向と、天皇讃歌の限界が明瞭に示されている。天皇讃歌の、和歌における形式化と結局人磨の影響を抜け出せないと言う敗北感も赤人の充分意識する所であつたらう。と言うよりもっと積極的に、讃歌の形式化を計り、反歌の明確化、

独立性を押し進め、遂には自分の最も新しいと信じる巻八の六首を生んだのであつた。その過程を彼の年代明記の最後の作「八年丙子夏六月、吉野の離宮に幸しし時」の歌(一〇〇五・一〇〇六)に見る事が出来る。ここで赤人は、「不盡山の歌」で行つたのと同じ単純な対句と美しい景色の讚美に徹して、反歌に対する土屋文明氏の「私注」の次の評が全てを語っている。

平板で見ただけの歌である。内容のない作者が円熟すると、かふいふことに成るものなのであろうか。

以上のように赤人の長歌は從駕の作において力を失ない、その反歌が独立し、理を取り込んで新生面を開こうとし始めた。然し、それは長歌に付属する反歌としてはもはや存在し得ないものであり、結局巻八に見られるような独立した短歌の形で完成されたのであつた。

三

ところで、赤人歌の全体像を万葉集に探り、更に古代の資料の中で参考になるものを見て、赤人の人と作品をもう少し明確にし、叙景歌へ赤人を駆りたてたものについて考えてみたい。赤人の歌は、巻三に長歌五首短歌十四首(含反歌六首)、巻六に長歌八首短歌十五首(全て反歌)、巻八に短歌六首、巻十七に短歌一首(山部宿禰明人

の作とある)の長歌十三首短歌三十六首、総計四十九首である。題詞と左注によって必要最少限の事は分るが、赤人の人となりを窺わせるような記述は全くない。ただ從駕の作の左注に、幸行供奉の年月を検注したものが三ヶ所出ているが、必ずしも赤人歌に対する編者の注目があつた事を示すものではなからう。赤人歌の製作時代は万葉集に明記されている限りで見ると、「神龜元年甲子冬十月五日、紀伊国に幸しし時に山部宿禰赤人の作る歌」(九一七~九一九)に始まって、「八年丙子夏六月、吉野離宮に幸しし時に山部宿禰赤人の詔に応へて作る歌一首」(一〇〇五・一〇〇六)に至る、神龜元年(七二四年)から天平八年(七三六年)の間であつた。即ち赤人は聖武天皇時代の前半を作歌活動の確実な時期とする歌人である。

ところで、赤人の從駕、詔歌の前後を見ると、明らかに二人の歌人が浮かんで来る。それは笠朝臣金村と車持千年である。この二人の赤人をとりまく意味については、風巻景次郎氏に既に論考がある⁴、三人の登場の場合、赤人は常に二人の後方に位置している事からして、赤人が三人の中で地位・年令・文学的意味のいづれにおいても抜きん出た形跡は全くない。誰が見ても、金村を先頭とする宮廷歌人の一団とする方が正しいし、三人の長短歌も、赤人の反歌(九二四・九二五)を除けば殆んど差異を見出す事は困難である。

さて万葉以外の資料で赤人関係のものと言へば、山部氏についての有名な物語がある。それは、古事記・日本書紀・播磨風土記の中の、後の顕宗・仁賢天皇を発見する山部氏の先祖伊豫来目部小楯の活躍物語である。履中天皇の孫であり、市辺押磐皇子の子である袁祢命・竟祢命(書紀では弘計・億計)が流亡の地播磨で発見される

話である。古事記清寧天皇の条では「針間の国の幸である山部連小楯」が新室の冥で弟である「袁祢命の詠」を聞いて兄弟を発見した様子を

爾に即ち小楯連聞き驚きて、床より墮ち転びて、其の室の人等を追ひ出して、其の二柱の王子を、左右の膝の上に坐せて、泣き悲しみて、人民を集へて假宮を作り、其の假宮に坐せまつり置き、驛使を貢上りき。

と書いている。書紀では「播磨国に遣はせる司山部連の先祖伊豫来目部小楯」が同様の発見をした話が、清寧天皇二年冬十一月の条と顕宗天皇即位前紀に載せられている。更に播磨風土記美囊郡にもこの話は記載されていて広く知られていた事が分る。顕宗紀元年夏四月には来目部小楯が山部連の姓を賜つた記事がある。

詔して曰く、凡そ人主の民を勧むる所以は惟れ授官なり。国の興る所以は、惟れ功賞なり。夫れ前播磨国司来目部小楯、求め迎へて朕を率ぐ。厥の功茂し。志願しからむ所、難ること勿く言ませ」とのたふ。小楯、謝りて曰さく、「山官、宿より願して所なり」とまうす。乃ち山官に拜して、改めて姓を山部連の氏と賜ふ。吉備臣を以て副として山守部を以て民とす。善を哀めて功を顕し、恩を酬いて厚に答ふ。寵愛殊絶、富能く儔ふこと莫し。天皇となる二人を発見した小楯が賞讃されるのは当然で、右の論功行賞の話でも分るように、山部氏誕生の物語は広く強烈に人々に流布していた。山部連は天武十三年に八色姓の第三の宿禰を賜はるが、山部氏の一人であり天皇の近くにいた赤人が小楯の手柄話を知らなかつた筈はない、従来、山部氏の一人である事から、赤人も山

林の管理、産物の貢上に當って富有了たのではないか、自然に風土に親しんでいたのではないか、など説かれているが、それ以上に、右の小楯の話を誇りにしている赤人を想像する方が確實ではなからうか。大伴家持に見られるような「天皇の伴としての矜持」ほどではなくとも、過去の山部氏の栄光に思を駆せて脾肉の嘆を託っていたに違いない。古事記・日本書紀の記事の多くは氏族の名譽を認めようと書かれているし、書紀は講筈が行われたか否かは不明であるが、天皇の周圍に居て記事を知る機会には赤人にはいくらでもあった。確かに從駕に供奉し応詔獻歌の榮に浴してはいたが、それも所詮衰へて行く和歌の天皇讚歌の世界においてであった。

古事記・日本書紀が編纂され、風土記や律令が成立し、人々が競って漢詩文を創るようになる過程は、文字による文化の定着であった。書紀の中に見られる華麗なる文飾、風土記の詳細な記録性、万葉集にも見出される漢詩文の中に見出される典拠主義など、その実態は漢字漢文による表現の精緻さであった。しかも官吏として出世を希む者は、よほどの貴顕でない限り、学問教養の獲得が必須であった。推古紀に聖德太子が「内教を高麗の僧慧慈に習ひ、外典を博士覺智に学びたまふ」などとあるように、最初上流階級の治天下の学問が、律令の整備とともに官僚たる者の習得すべきものとなったが、それを指導したのは、学問僧や帰化人であった。元正天皇靈龜二年五月の

丁酉、制、大学典葉生等 業未成立、妄求薦奉 如是之徒、自今以去 不得補任国博士及医師

など、生平端な学問で官吏たらんとする者を戒めている。聖武朝で

山部赤人論(一) — 卷八雜歌六首誕生の背景 —

も、一般の大学生徒の困窮する様子が続日本紀の中に見られたりするが、地方におかれた国学とともに大学の存在は大きかった。そのような時代にあつて、歌を四十九首残すより他に何の律令的言辭も発しなかつた赤人の存在はいかなるものであり、その心中はと考えるならば、恐らくあまり人生を楽しまなかつたのであるう位は言える。彼の從駕の作や羈旅の歌には少しも晴れがましさを楽しさがなく、それが心に染み入るような静寂を呼びおこしたが、讚歌としては異例なものであり、彼の人生も謳歌すべきものでは決してなかつた。そうなれば彼の行きつく所、目指す所は一つである。即ち文学の虚構性の中に自分の才能を発揮し心を慰さめるようになったのである。讚歌から卷八の叙景歌への変化は、このような過去の榮光を追いつながら現実が自分を置き去りにして行く事を自覚した繊細な神経から生れて来たのであつた。万葉第三期の花やかな実態の裏には、撰者の意志が反映していたのではないかと述べたのは今の所あくまで推測の域を出ないが、それに対して明瞭に言えるのは、第三期の歌人達が自分の生きている社会における自己存在の意義を必死になつて求めていたに違いない、と言う事である。憶良は言うまでもなく、旅人も虫鷹も、そして赤人も、強大な権力を集的に把握する上層官僚機構と、底辺にうごめく青人草との中間に不安定に存在するまさに歌人であつた。彼等は自己表現の手段としての「歌」について「歌とは何か」について真剣に考えた。憶良や家持の場合を見て明かであるが、自己表現の手段が漢文である場合、当時の文人達は形式と典拠を尊んじ華麗さを追求した。その人達が「倭歌」をどのような思いで創つたのであろうか。古今集の撰者は「やまと

うた」に激しい確古たる自信を持っていたが、第四期の家持も歌の存在意義をはつきり認識していた。家持は彼の絶唱と言われる、天平勝宝五年（七五三年）二月二十五日の作

うらうらに照れる春日に雲雀あがり情こころ悲しも獨りしおもへば

（四二九二）

の後ろで

春日遅々にして鶴鷗正に啼く。悽惻の意歌にあらすは撥ひ難し。よりに此の歌を作り、式ちて締緒を展ぶ。……

と言っている。ここまで文学の効用について明言することは家持にして初めて出来たのだが、「倭歌」の可能性を探りつつ歌を詠むのは第三期の歌人の常であった。赤人は歌以外に何の心情も文字化していない。たとえ官吏として何か行つたとしても私達に知る術はなく、まさしく歌人として、歌の中に「やまとうたとは」に解答をした人であった。

四

繰り返し言うように、赤人は出自も官職も全く分らないが、赤人より先輩に当る柿本人麿も万葉集を離れると全くその存在を知る為の信ずるに足る記録を見出し得ない歌人である。山柿と稱される、後に歌仙と尊敬される二人が同じような状態であったのは、和歌の当時における存在価値と無縁ではない。然し、人麿の超人的な和歌創造の力は万葉集において巨大であり、万葉集においてもその影響力は少くはなかった。然し、既に見たように赤人は同時代の金村や千年と何等変つた存在ではなかったし、人麿と比べるには歌柄も小

さい。にもかかわれず中古以来人麿と並べて尊重されたのは、赤人の叙景歌の中に後世の人々の琴線に触れるものがあつたからである。

それは赤人の知的感受性が生んだ虚構の美そのものであつた。赤人は「文学の虚構性」を獲得することで傑作である巻八の「赤人の四首の歌」を詠み得たが、それは現実の生活の中にある様々の拘束からの解放と、美なるものの典型を求めての結果であつた。後に「花鳥風月」、或いは「雪月花」の言葉で風雅が言い換えられるが、「四首の歌」を見るとまさに風雅の極地であり、完成された知的産物であつた。従来この四首の中に、写実性や実用性を見ようとする説があるが、それは「万葉らしさ」を古代的なある種のものに固定化するあまりの考えであつた。「四首の歌」を中心に更に赤人の新世面を明かにして行きたい。まず万葉集巻八についてであるが、この巻は、歌を四季でまず分け、それぞれの季を更に雑歌と相聞に分けている。万葉の三大部立の雑歌、相聞が四季の下位分類となつているのは、巻十とともに平安時代以降の歌集に連なるものである。ただ、四季の歌数は、春四十七首（含長歌三首）夏四十六首（含長歌一首）秋百二十五首（含長歌二首旋頭歌四首）冬二十八首となつていて、秋の歌数が多いのは後世と同じであるが春の歌はそれ程多くはない。時代は天平期のものが多く、題詠や私宴の際のもの、憶良の七夕の歌十二首などが目立つが、歌を私的な場で作つて楽しむ気分が際立っている。赤人の作は春の雑歌に五首、夏の雑歌に一首の計六首が見出される。既に五味智英氏が^注

この時期から次の時期にかけては、宴飲の歌が流行した。身分の低い彼のことゆゑ貴頭の宴遊には出なかつたかも知れない（有

名な歌人といふ事では出る機会があつたかも知れないが、仲間同志の宴の歌は作つたであらう。赤人の作品の、屈折の目立つ歌・緊張度の少い歌などで作歌事情の明示されて居ないものには、宴歌があるのではないかと思はれる。

と言われたように、卷八の赤人の歌は私宴に披露されたと考えてよいのではなからうか。その製作年代であるが、土屋文明氏は「万葉集年表」で「神亀中或は天平初年と見ゆ」としているのに対し、中村憲吉氏は「四首の歌」の前二首について述べた後^注で

而してこれ等の歌は一般には家持の技巧の歌風平安朝歌風繊細の先駆をなすと稱せられて居る歌であるが、私はこれを次の歌などとともに、技巧の円熟した赤人の晩年の歌ではないかと思はれる。

と赤人晩年製作を推定している。私もこれまで述べて来たように卷八の赤人歌は彼の後半期の歌であると思う。土屋文明氏は「萬葉集私注」の中で「四首の歌」を評して、

野遊を一つの行楽としたことは他にも見られる。従つて「一夜寝にける」にも、實感の裏附は甚だ稀薄に感ぜられる。(1425について)

櫻花の盛りの短いのを惜しむ心であるが、平板な上に、言ひまわしに理が這入つて来て、嫌味をさへ感じさせる。赤人の作中でも低俗なものである。(1425について)

ソレトモミエズなども常套的な誇張法で、調子もだれて居る。(1426について)

全体として実感の乏しいのは、明日、昨日、今日の如き語を並

山部赤人論(一) 一巻八雑歌六首誕生の背景一

べて興じて居る技巧のためといふより、此の歌が実感の甚くことなく、題詠的に成立したためであらう。

と述べて、実感のなさ、理に勝つて居る点を酷評している。然し、本論文の最初でも述べたように、万葉の歌人達にとつての歌と、私達にとつての歌とは決定的な違いがある。赤人及びその周辺の人達にとつて「四首の歌」の誕生は新鮮で理智にキラキラと輝いて感じられたに違いない。最初に「私注」の文章を挙げたので「四首の歌」が常に悪評を受けているように見えるが、実はその逆であつて、近代の研究者の多くはやはり赤人歌らしい美的情調を充分に現わしている歌として評価している。然し現在では、「四首の歌」が単なる自然への傾倒を率直に歌つたものとする説はなく、後宮の女性達へ提供された「野遊のさる日のサロン」の歌であると考えたり、「四首の歌」は前二首が男性の歌で贈歌、後二首が女性の歌で和歌の対応構造が明らかかな作だとする説など、場や構成に目が向けられている。そして多くの人は「四首の歌」が知的な風雅の作品として成功している点を明かにしている。今ここで卷八の歌の一首一首について論証する余裕はないが、実は赤人らしき、赤人の歌の独自性は彼の発想と修辭上の知的技巧性である事を和歌史に照して述べてみたい。一体、中古以来の赤人像が何によつて形象され伝承されたかを知る最もよい手がかりは、勅撰集及び「赤人集」の中に採られた赤人歌がいかなるものであつたかを知る事であらう。先ず「赤人集」であるが、「原赤人集」と思われるものは、源順達によつて訓読された卷十の古点歌である事が明かにされている。現存本はそれに「赤人集」と言う認識によつて増補されたと思われるが、それは――

内は相当する万葉の歌番号―

春・た・た・ば・若・葉・摘・ま・む・と・標・め・し・野・に・昨・日・も・今・日・も・雪・は・降・り・つ・つ・
四二七)

わが背子に見せんと思ひし梅の花それとも見えぬ雪の降れれば

(一四二六)

若の浦潮満ち来れば濁を無み葦辺をさして鶴鳴き渡る(二七一)

明日香河淀さらず立つ霧のおもひ過ぐべきことならなく(三三二五)

の四首である。万葉の歌と若干の違いはあるものの、いずれの歌も知的技巧に富んだ歌である。なかでも「四首の歌」の中から二首が採られている。

次に勅撰和歌集であるが、赤人の歌とされているものの中には卷十所出のものが多く万葉集における赤人歌は

一、古今集仮名序の古注に「春の野に」(一四二四)、「若の浦に」(二七一)の二首

一、後撰集に「わが背子に」(一四二六)の一首

一、拾遺集に「恋しくば形見にせむとわが宿に植ゑし秋萩今さかりなり」(一四七二)の一首

一、新古今集に「明日からは」(一四二七)、「うば玉の夜の更げゆけば楸おふる清き河原に千鳥なく也」(九二五)、「田子の浦に打出でゝみれば白妙のふじの高嶺に雪は降りつ」(三一八)の三首

一、続古今集に「春の野に」(一四二四)、「風吹けば浪や立たむと待つ程につたの細江に浦隠れるぬ」(九四五)、「和歌の浦に」(二七一)の三首

一、万葉集に、「秋風のさむき朝に佐野の岡こゆらむ君にきぬかさましを」(三六一)「昔べのふかきつゝみは年深き池の渚にみくさ

生ひにけり」(三七八)の二首

一、新千載集に、「足引の山桜花日を経つゝかくしにほはわれ恋ひめやも」(一四二五)「飛鳥川」の二首。

一、新拾遺集に、「あめつちの」(三一七)の長歌一首。

以上のようになる。右に端的に示されているように、巻八の「四首の歌」が後世の赤人像形成の中心となったであろう事は容易に想像出来る。実は真の赤人作でないものを、赤人作歌と考えた勅撰集の撰者、「赤人集」の撰者の赤人観も面白いテーマであるが、結論的には巻十の歌の中古的な技巧を赤人と思ひ込んでいたと推察する他ないようである。

紙幅の関係もあってまとめねばならないのであるが、肝腎の巻八の雑歌六首に入らない内に筆を擱かざるを得なくなつてしまつたようである。全く私の至らなさを故であるが、実を言うと、近年本学の紀要に万葉第三期の歌人達について書いて来たので、どうしても第三期及び赤人について考えている事を出来るだけ言いたかつた事と、巻八の六首、就中「四首の歌」については以上私が縷々述べたような事を前提として更に深く述べてみたい希望もあつたのである。

注1 「山部赤人―長歌・反歌における構成意識―」(日本文学

研究資料叢書「万葉集1」)

注2 「萬葉集の歴史的地盤」(「萬葉集大成」1)

注3 卷三の或本の歌(三六三)は(三六二)番歌の異伝なので
ここでは一首として数えなかった。

注4 「山部赤人」〔萬葉集大成〕9)

注5 「山部赤人」〔萬葉集大成〕9)

注6 「山部赤人」〔萬葉集講座〕第一卷春陽堂)

注7 伊藤博著『万葉集の歌人と作品』上

注8 清水克彦「赤人の春雑歌四首について」〔万葉〕九四号)